川越市立博物館

博物館だより

第14号

子供のいた部屋の再現

木造校舎の教室の再現

道具の使い方を聞く霞ヶ関西小学校の児童

昔の教室を体験する古谷小学校の児童

ミニ展「むかしの勉強・むかしの遊び」

当館では、ミニ展「むかしの勉強・むかしの遊び」を毎年開催しています。本年も１月24日㈫～３月12日㈰に開催し、多数の来館者においでいただきました。

この展示は、「市内小学校第３学年の社会科学習を支援し教育効果を高める」ことを目的の一つとしていることにも特色があります。そこで、昭和30年代の居間や教室の再現を中心に、約100年間の生活の変遷を伝える道具や学習用具、写真等の資料で展示を構成しています。

博物館を活用した市内各小学校の社会科学習では、資料を観察したり、実際に触れたりしながら生き生きと学ぶ姿が数多く見られました。さらに、家族で来館し、父母の子供の頃の話を聞く児童も多く、生涯学習施設としての博物館に親しむ心の育成の一助にもなっています。

展示に御協力いただきました市民のみなさんと関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

神さま絵かき 岩崎勝平（1905－1964）－その芸術と生涯－

孤独と放浪のはじまり

画壇で新進画家として力量を認められ順風に乗って歩んでいた人生の風向きが、昭和16年暮れ頃から怪しくなってきます。これには色々な理由が考えられますが、岩崎勝平の生涯において二つの大きな出来事が重なっておこります。画家、斉藤五百枝の娘、百譽との結婚と半年後の彼女の死、それに理解者であった父、育太郎の死が挙げられます。

昭和16年春、先輩画家の娘と結婚しましたが、その新婚生活はあまり幸せなものではなかったらしく、半年程して事故で亡くなります。この新妻の死がその後の人生に非常に大きな影響を与えました。

薬水を汲む（当館蔵）

斉藤五百枝は挿し絵画家として活躍した人で岩崎勝平と同じく岡田三郎助の門下生で、光風会の先輩であり、妻の死を巡っての義父とのトラブルは光風会を巻き込んでのものとなって、光風会の会合で先輩を殴って罵倒するというような事件もあって、以後、光風会を離れます。

また、文展への出品も昭和16年秋の「薬水を汲む」が最後となりました。

また、昭和13年に庇護者の一人であった福沢桃介が亡くなったあと理解者であった父、育太郎が昭和15年暮れに亡くなります。岩崎勝平は後妻の子供であったこともあって長兄達との折り合いも良くなかったため、また、本人が親族からの援助を望まなかったこともあって、経済的に困窮するようになり生活が破綻していきます。戦時体制が強化され、画家にとって落ち着いて制作に没頭できる環境になかったことも事実ですが、妻を亡くした精神的な痛手とそれに起因する画壇との決別、また、経済的な困窮も手伝い、以後、貧乏放浪型の孤独な人生を歩むことになります。

素描画家として新境地を開く

昭和22年頃貧しく放浪的な生活を送るなかで作家の川端康成、美術評論家の河北倫明らの知遇を得、その理解と支援のもとに戦後の代表的な仕事として評価される鉛筆素描による東京百景シリーズ、木炭、パステル素描による女十二題シリーズを制作します。この時代は上野のアサオ画廊で小品展を２回、また日本画家小松均との二人展を銀座の資生堂画廊で開催した程度で油彩作品の制作は小品が主で制作の量もそう多くはなかったようです。たびたび知人を頼って東北、信州などを旅しスケッチを残しています。

昭和25年、数少ない理解者の一人であった川端康成、河北倫明らが発起人となって「岩崎勝平デッサン東京百景頒布会」が組織されます。これは困窮のなかで思うように制作に没頭できない画家の画才を惜しんだ両氏らの、美術愛好家から東京百景の注文を集め経済的にも絵を落

ちついて描ける環境をつくるための配慮でした。また、優れたデッサン力のある鉛筆素描による東京百景シリーズの完成は、将来、岩崎勝平の代表的な仕事として評価されるだろうとの確信から始めた事業でもありました。

しかし、遅筆で、反故を重ねての労作であっ

東京百景の内　東京工業大学（個人蔵）

東京百景の内　丸の内（個人蔵）

たため一枚の作品を仕上げ、納得のいくものができるまでに大変な努力と時間を要し、すべての注文をこなすのは並大抵のことではありませんでした。川端康成の文章によれば６Ｈ、７Ｈの硬い鉛筆を先細く削っての強い線を駆使してのデッサンで、途中で間違えたり芯が折れたりすると消しゴムを使って直すことをせずに反故にして新しい紙に描き直したといいます。このような美にとりつかれ弊衣をまとい彫心鏤骨の生活を送った岩崎勝平を川端康成は「神様絵かき」と讃えたのです。

この苦心の成果は上野松坂屋（昭和26年）、東京丸の内の中央公論画廊（昭和30年）で東京百景展を２回開催して発表しています。その対象に鋭くせまったきびしく、清冽な美しさは一部の識者から高く評価されましたが、健康上の理由もあってシリーズとしての完成をみることなくおわります。

女十二題の内　赤い服の婦人（個人蔵）

また、この時代は東京百景と前後して女十二題と題した木炭、パステルによる婦人像デッサンを制作しています。このシリーズも東京百景に並ぶ優れたもので、堅固で鋭い線描には人物画家として本領を発揮した岩崎勝平の真髄をみることができます。どれも対象の内面までも捉えた見応えある作品ばかりです。昭和29年、31年の２回、中央公論画廊で女十二題展を開いて作品を発表しています。しかし、東京百景と同じくシリーズとしての完成をみませんでした。

東京百景、女十二題にみられる他に例をみない岩崎勝平の独特な才能は一部の識者からは高く評価されましたが、川端康成、河北倫明らの応援にもかかわらず経済的に行きづまり、癌による体力の衰えなどによりシリーズとして完成されることなく終わったことは非常に残念なことです。岩崎勝平は画壇からも忘れられ、失意のうちに昭和39年ひっそりと世を去りました。

（館長補佐　小林　誠）

酒井忠勝画像について

（絹本著色酒井忠勝画像）

1　はじめに

肖像画は、特定人物の容貌・姿などを描いた画像であり、像主の人物像を理解するうえで、貴重な資料といえる。

川越藩ゆかりの藩主画像も、十数点伝存している。中でも酒井忠勝画像は、企画展開催のための資料調査を進めるなかで、実見する機会を得た。

この画像は、現在小浜市立図書館に寄託されている。方量は、縦205.0*cm*横69.5*cm*である。

隠元の画賛を有し、従来から、狩野探幽筆による画像であると伝えられている。しかし、画像が描かれた年代や、施主などについては明らかにされていない。

そこで今回は、上記の点などを含めて、この画像について、若干検討してみたいと思う。

2　絵師と施主について

襯と小袖を袴に着籠め、小刀の鞘が透けてみえることから紗の法衣を身にまとっているのであろう。左手には数珠をもっており、像主である忠勝の剃髪した姿を描いている。また、像主が向かって左向きに描かれている。以上のような特色から、この画像は、忠勝没後に描かれた遺像ではないかと考えられる。しかし、次に掲げる資料などから、忠勝生存中に描かれた寿像ではないかとも、考えられる。但し、寿像の場合でも、描かれた姿から、忠勝が剃髪してから没するまでの間ということになろう。

それは、「空印寺殿年譜」や、忠勝の嫡子忠直の日記である「御自分日記」である。これらの資料によると、万治三年（1660）十月二日、忠勝・忠直父子が共に登城し将軍家綱に謁見した後、忠直が、狩野榮心を呼んで繪を描くように命じている記述がある。確かに忠勝の像を描

酒井家編年史料稿本 第101冊

くようにと、記述しているわけではない。しかし、万治三年十月は、忠勝が剃髪した万治三年四月からちょうど半年後のことであり、また、忠勝が生存中であるので、寿像としての条件にあてはまる。しかも、忠勝が没するまで、このような記述は他には見当らない。さらに、忠勝が没した後でも、狩野派の絵師を呼んで、絵を描くように命じている記述は見当たらない。こうしてみると、万治三年十月に狩野榮心に描かせた絵とは、忠直にとって、よほど重要な意味をもっていたものなのであろう。

この狩野榮心とは、「空印寺殿年譜」や「酒井家御代記」の万治三年十二月三日の条より、狩野「永眞」すなわち、「狩野安信」のことを指していると考えられる。この狩野永眞安信は幕府御用絵師であった狩野探幽守信の弟であり幕府の奥絵師として活躍した人物である。特に永眞が隠元から示偈を受け、黄檗僧の賛を有する永眞筆の画が、多く残されているということが注目される。これらのことから、狩野永眞と隠元が、親密な関係にあったことを推測することができるのではなかろうか。

酒井忠勝と隠元の関係は、忠勝が黄檗山の造立を援助したり、万治元年（1658）父忠利の三十三回忌の追善供養を行なうために、隠元を招くなど、非常に親密なものであった。

隠元をとおして、酒井忠勝そして狩野永眞の三者の親密な関係の程を窺うことができるのではないか。

それゆえ、万治三年十月に狩野永眞安信が描いた絵が、酒井忠勝の画像であっても不思議ではないと思われる。

以上のようなことから、この酒井忠勝画像は忠勝が没する二年前の万治三年（1660）十月に描かれたということになろう。すなわち、この画像が、忠勝生存中に描かれた寿像であると考えられる。そして、筆者は狩野永眞安信、依頼者つまり施主は、忠勝の嫡子酒井忠直ということになるのではなかろうか。

3　おわりに

この画像は、描かれた像主の特色から見ると遺像ということになろう。しかし、記録などから判断すると、寿像である可能性が高いように思われる。

ただこの画像は、信仰心があつく、神仏を崇拝していた酒井忠勝を、象徴する姿で描いたものであることに間違いないであろう。

（付記）

今回この資料の写真掲載にあたり、小浜市教育委員会の方々から、多大な御協力を賜った。また、県立若狭歴史民俗資料館学芸員の芝田寿朗氏より、格別なる御教示を賜った。ここに、厚くお礼申し上げる次第である。

参考文献

「空印寺殿年譜」酒井家文庫
「酒井家御代記」　〃
「御自分日記」　〃
『三河武士と家康の肖像画図録』三河武士のやかた家康館　1993年
小林明「紙本著色今川氏真・同夫人像について」『静岡県史研究』第9号

（教育普及係　井口信久）

学校教育と博物館(9)
郷土資料室の開設と利用について

博物館は、その事業を行うに当たっては、土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助しうるようにも留意しなければならない。(博物館法第3条第2項より)

生涯学習時代を迎え、学校教育には地域の教育力を生かしていこうという姿勢が今まで以上に積極的になってきている。このような動きは、「文化伝統の尊重と国際理解」教育の推進の具体的な姿のひとつである。

「文化伝統の尊重」とは他国の文化を知ることだけでなく「自国の文化についての理解」があってこそ、他国の文化と比較し、その特徴をより深く知ることがきるのである。その基本として地域文化を知ることは極めて大切なことといえる。

このような教育の流れのなかで、児童数の減少とともに余裕教室の増加が見られるようになった。川越市立博物館では、準備室時代より学校との連携を積極的に進め、学校での郷土資料室の設置にあたって積極的に協力してきた。そのなかで寺尾小学校や牛子小学校では、展示が具現化し学校教育のなかに生かされている。

寺尾小学校の展示

寺尾小学校では昭和62年ごろ、児童数の減少によりいくつかの転用可能教室が生じてきた。そこで、郷土資料室を設置し、より児童の学習に生かしたいとの学校からの要望があった。そして、学校と協議しながら展示室の構成を設定していった。

郷土資料室を活用して学習する子供たち（寺尾小学校）

郷土資料室を活用して学習する子供たち（寺尾小学校）

検討の結果「民話の世界と新河岸川」がテーマとなった。1年から6年までの国語の教科書にみられる民話をテーマに、子供たちの国語の理解の一助となるようにすること。さらに、この地域は古くから新河岸川を使った舟運が盛んであった。そこで、これらに関連したテーマを設定することで、子供たちが地域を学ぶ機会となるようにとの配慮からであった。

民話の展示にあたっては、各学年に掲載されている民話の一場面をとりあげ、簡単な素材で仕上げた。たとえば、当時の4年生の国語では「ごんぎつね」が取り上げられていた。そのなかで「びく」がでてくる。子供にはなじみのない釣り道具である。できるだけ古い実物資料を展示すると共に背景には兵十が川でうなぎをとる場面を描いた。これらのことで、「びく」を具体的にイメージでき、さらに読みが深まるのではないかと考え設定した。新河岸川の展示では、当時の舟の写真や船頭の生活道具・はっぴ等の実物展示をおこなった。

開設当時は、教室の特色ある活用の仕方として評価をいただき、数多くの視察があった。学校での具体的な活用については、平成3年に博物館で発行した研究冊子『やまぶき第1集』の実践事例をご参照ください。

しかしながら、開設以来7年を経過すると展示具の傷みが激しく、さらに教材との関わりにも変化があり改善する必要がでてきた。ちょうどそのようなおり校長先生より改修の相談を受けた。そこで「新河岸川舟運と川越の子供」を新しいテーマとして現在の展示が、平成6年9月にできあがった。

展示構成としては、「寺尾の四季」「舟運のはじまり」「川越の街と子供」「あそび」の4つを展示の柱とした。これらの展示構成の決定にあたっては実際に利用する学校と打ち合わせをおこないながら定めた。特に、子供たちに体験学習ができるような内容を設置できないかが話し合われたその結果、「あそび」が設けられ、博物館で実施している体験事業で学校でも簡単にできる「どろめんこであそぶ」や「切り紙に挑戦しよう」などを設置した。

展示具の設置にあたっては、寺尾小学校だけで利用されるのではなく希望があれば市内のどの学校でも展示が可能なように、簡易な組み立て式で耐久性のある素材を工夫した。移動については、4人程度で1日あれば別の学校で展示できるようになっている。資料の扱いについては安全性を考え、ケース展示を主に資料管理がやりやすくした。

牛子小学校の展示

「農家の中庭」これが牛子小学校のテーマである。平成2年10月に完成するまでに学校の考え方など尊重しながら展示構成を決定した。地域には水田地帯が広がっている。この様な地域の特色を展示に生かし、牛子小学校らしいテーマを設定することで、子供たちが地域を知り、今まで以上に地域に対して愛着心を高めることができるのではないだろうか。

そこで、教室には3つの壁面に地域の四季の風景を描き、それに合わせて苗代作りから収穫までの米づくり道具を通して農家の仕事を紹介している。立体的展示としては農家の縁側を再現し、雰囲気づくりをしている。中央には農家の中庭で作業を行なう道具等を展示し、農家の仕事の内容が多角的に理解できるように工夫している。表示は少なくし、解説パネルは一ヵ所に設置した。展示制作にあたっては、地域の父兄や美術専攻の学生の協力を得てある程度のグレードのジオラマとなった。

展示室内のようす（牛子小学校）

学校の郷土資料室の課題

学校の展示は専門施設ではないため、自然光温度など条件がよくない。それらを考慮し展示具や展示資料の選定をおこないながら、ある程度質の高い展示はどうあるべきかが今後の研究課題のひとつである。また、学校で教科・特別活動にいかに利用できるか、さらに体験的な内容をどのように実施していくか解決すべき課題も多い。

その他の郷土資料室

この他にも高階西小学校では、「高階の自然と歴史」（詳しくは学校利用の手引き書『やまぶき第2集』参照）、霞ヶ関北小学校では「交通の移り変わり」を開設した。しかし、大規模改修や児童数の増加などで残念ながら閉鎖してしまった。今後時期をみて再開していく予定である。また、名細小学校や霞ヶ関南小学校など地域性を生かしたテーマを設定した郷土資料室の設置に努めていきたい。

（教育普及係長　水谷　薫）

平成７年度のおもな事業

●展示計画

◆川越学事始め　－郷土史の系譜を追う－　３月25日（土）～５月14日（日）
◆戦時下の川越　７月29日（土）～９月17日（日）
◆酒井忠勝にみる近世大名の姿
　－川越藩祖酒井家ゆかりの品々－　９月30日（土）～11月５日（日）
◆名　刀　展　－刀と刀装具にみる日本の伝統美－　11月14日（火）～12月17日（日）
◆ミ　ニ　展　－むかしの勉強・むかしの遊び－　１月23日（火）～３月10日（日）
◆古墳時代の川越　３月23日（土）～５月12日（日）

●講座・教室

◆野外博物館教室
　城下町を歩く　４月16日（日）
　新河岸川を歩く　５月21日（日）
　喜多院・東照宮を歩く　10月22日（日）
　鎌倉道を歩く　11月12日（日）
◆古文書講座　５月20、27日、６月３、10、17日（毎週土曜日）
◆子供博物館教室　８月２、３、４、23日、９月23日、10月28日
　11月19日、12月16、17日、１月27日、２月17日
◆土器作り講座　９月３、16、17日、10月１日（10月８日は予備日）
◆歴史講演会　－鎌倉時代の川越－　11月11、18、25日、12月２日（毎週土曜日）
◆絵図を読む　２月17、24日、３月２、９日（毎週土曜日）

・講座の募集は、広報川越・チラシなどで随時行ないます。詳しい内容等は、博物館にお問い合わせ下さい。

●全館燻蒸のため休館　７月３日（月）～７月12日（水）

利用状況

（単位：人）

	一般			団体			共通				その他		合計
月	大人	学生・生徒	児童	大人	学生・生徒	児童	大人	学生・生徒	児童	他館購入	招待	免除	入館者合計
12月	1,028	61	100	224	0	0	1,469	41	33	1,329	192	2,708	7,185
1月	2,319	135	311	98	0	30	1,854	95	169	2,669	247	2,658	10,585
2月	1,934	145	263	335	0	38	1,757	44	62	2,890	58	6,790	14,316

発行日　平成７年３月31日　発行　川越市立博物館
〒350　川越市郭町２丁目30番１号
ＴＥＬ　0492-22-5399